

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01744

研究課題名(和文) 一流スポーツ選手の社会的責任としての社会貢献活動についての研究

研究課題名(英文) Research into community service as part of the social responsibility of top-tier athletes

研究代表者

二杉 茂(Nisugi, Shigeru)

神戸学院大学・共通教育センター・名誉教授

研究者番号：00156134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：わが国及び海外の一流スポーツ選手の社会貢献活動について、活動内容や意識についてインタビュー形式で比較検討調査を行い明らかにした。それらの結果を元にわが国一流スポーツ選手の文化的レベル向上に関する提言を行った。本研究の目的を達成するために、中国の山東大学や台湾の台湾師範大学、アメリカのハワイ大学、韓国のソウル大学などでインタビューを行った。国内において大学生に対して、アンケートを実施した。UNIBASについても調査、検討した。その成果、アメリカにおけるスポーツ選手の社会貢献の意識と行動の高さが明らかになった。また、わが国の場合も競技レベルが高いほど社会貢献意識が高いことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

夏季オリンピック、パラリンピック開催都市に東京が決定されたが、マスコミ及び関係団体は、インフラの整備や本番での活躍に向かっての強化策、メダル獲得について議論がなされてきた。しかしそれは、発展途上国並みのスポーツ文化政策である。もっと、スポーツ選手達の社会貢献活動という文化的行動や価値についても問題意識を持つべきである。今回の研究で、わが国の一流スポーツ選手の社会貢献についての意識や実践はアメリカなどに比べて低いレベルにあるが、それを高めなければならないという意識の高さが明らかになった。この意識のレベルを上げていくためには、国民全体の社会貢献意識をあげていかなければならないのである。

研究成果の概要(英文)：Regarding the social contribution activities of top athletes in Japan and abroad, a comparative study was conducted in an interview format to clarify the activity content and awareness. Based on these results, we made recommendations on improving the cultural level of top-class athletes in Japan. To achieve the purpose of this research, we conducted interviews at Shandong University in China, Taiwan Normal University in Taiwan, Hawaii University in the United States, and Seoul National University in Korea. We conducted a questionnaire for university students in Japan. We also investigated and examined UNIBAS. As a result, the consciousness of social contribution and the high level of behavior of athletes in the United States became clear. In addition, it was revealed that in Japan, the higher the competition level, the higher the awareness of social contribution.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：スポーツ選手 社会貢献 国際比較

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2013年9月7日IOC総会に於いて、1964年以来56年振りの夏季オリンピック、パラリンピック開催都市に東京が決定された。日本国中が待ち望んだ朗報であった。その後のマスコミ及び関係団体は、インフラの整備や本番での活躍に向かっての強化策、所謂メダル獲得を如何にして達成して行くべきかについての多くの議論がなされた。辛辣な言い方をすれば、発展途上国並みのスポーツ文化政策である。インフラ整備、メダル獲得に向かっての強化策は、とても重要な事である。我々も何の異論もない、しかしながら、一方ではスポーツ選手達の社会貢献活動という文化的行動や価値についても問題意識を持つべきセクションの議論も必要ではないかと考え、今回の調査研究の動機になったものである。

2. 研究の目的

我が国及び近隣の諸外国の一流スポーツ選手の社会貢献活動について、その活動内容や意識についてインタビュー形式で比較検討調査を行い、明らかにする。それらの結果をベースに我が国一流スポーツ選手の文化的レベル向上への足がかりになれる様な提言を行う事を目的とした。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の手順によって本研究を進めた

2017年度

8月1日 10日 中国 劉明利国際交流部長にインタビュー 山東大学に於ける優秀スポーツ選手10名(男子6名、女子4名)に個人面談

12月8日 国土館大学 関根明伸教授に大学としての社会貢献活動についてインタビュー

12月13日 17日 台湾師範大学 湯添進教授「スポーツツーリズム」、台湾テコンドー代表監督李佳融教授、元台湾プロ野球選手蔡榮宗氏、元台湾バスケットボール代表コーチ石名宗教授にインタビューを行った。

2018年度

4月 7月 大学生及び一般市民に対してのアンケート調査を実施した。

対象 全国の7大学の体育会に所属する学生

2019年 1月23日 2月2日 ハワイ大学アスレティック部門の7種目のスタッフにインタビューを行った。野球部、バスケットボール部、アメリカンフットボール部、男子バレーボール部、ゴルフ部、水泳部、チアリーディング部。

2019年度

4月 神戸学院大学、流通科学大学、天理大学、関西大学、大阪体育大学、同志社大学のスタッフにインタビューを行った。

5月 常葉大学、中京大学、名古屋経済大学、浜松学院大学、龍谷大のスタッフにインタビューを行った。

6月21日 23日 名桜大学及び琉球キングススタッフにインタビューを行った。

8月26日 8月29日 韓国ソウル大学羅永一教授に面談し、韓国における一流スポーツ選手の社会貢献活動についてインタビューを行った。ソウル女子大学の Steaven Kapener 教授にテコンドー選手、張ヒョッキ教授には柔道選手、韓国外国語大学の Lonnie Edge 助教授には柔術選手の社会貢献活動についてインタビューを行った。

2020年2月11日 2月19日 ハワイ大学の下記スポーツ種目のスタッフ及びキャプテンにインタビューを行った。

ゴルフ部、水泳部、テニス部、女子バレーボール部、女子サッカー部、女子クロスカントリー

部、女子ソフトボール部、ビーチバレー部、野球部、アメリカンフットボール部。

4. 研究成果

本研究の狙いは、日本人スポーツ選手が本来のスポーツ活動以外の分野で大げさに聞こえるかも知れないが「世の為、人の為に」なる様な行動や活動を行っているかを実証し、諸外国のスポーツ選手達の文化性と比較検討し、今後のより高いスポーツ文化の創造に寄与出来る提言を示す事である。しかしながら日本人スポーツ選手や組織の社会貢献活動は、未熟の域を出ていない状況が、アンケート調査やインタビュー調査の結果から判明した。勿論スポーツでそれなりの結果を出しながら、尚且つ社会貢献活動に於いて多大な成果をあげ多くの人達から尊敬の念を集めているスポーツ選手やチーム、学校、企業もある。しかし、未だスポーツ先進国の米国とは、その差は大きい。その、大きな違いの理由は、国のスポーツ文化の相違であろう。高度な文化性は、その地域や国の経済力や教育力と密接な関係があると考えられる。その観点からすれば、今回の調査対象国では、我が国の位置付けは以外であった。米国、中国、韓国、台湾の国々と比較しても上位にランクされる中、我が国の社会貢献活動は、5 か国中、韓国と同様下位であった。この背景は、それぞれのスポーツ活動の拘束時間が長く、ハードであることから、社会貢献活動に費やす時間的余裕が取れないからということも調査で明らかになった。これだけスポーツ科学の発達や合理的なトレーニング方法の開発があっても日本のスポーツ文化は変わっていない事がある背景にあり、結果沢山の練習時間が要求されたり、単純にそのスポーツ以外の事に対して問題意識を持たない様なシステムが作られおり、勉強への環境整備や社会貢献活動等への停滞になっているのではと考えさせられた。文部科学省のUNIVAS 構想や米国のスポーツ文化の特徴である、シーズン制のシステム化等が、大学生の学びの環境を充実させたり、スポーツ以外の事についても問題意識を持たせる時間的余裕を生みだす事に繋がると思われた。

次に海外のインタビュー調査の結果から、その国や地域性やスポーツ選手の特徴を述べたい。

中国山東大学の一流スポーツ選手達の社会貢献活動について

老人ホームや福祉施設を訪問し、入居者の話相手になったりゲームや囲碁、歌や音楽の演奏等を通じて心を豊かにしたり、楽しんで貰う為の活動が特徴であった。この山東省は儒教の孔子が生誕した所であり、孔子の年長者を敬うと言う思想がこの様な行動の背景にあるのではと思われた。

台湾師範大学関係の一流スポーツ選手の社会貢献活動について

それぞれのトップアスリート達がオフシーズンを利用して、発展途上の子供達にスキルアップ指導を子供クラブや各種目教室に赴き指導にあたっている。又、ユニークな試みとしては、リタイア生活者に対して、健康の維持増進や生きがいとしての生涯スポーツに繋がる為の運動処方としての指導も行っている。そして、病弱な高齢者に対しての慰問、障害者への勇気や希望といったモチベーションアップに繋がる為の訪問活動も盛んに行われている。弱者への様々な取組みは、日本の実情とは違い、多いに参考にしなければならない。

韓国のサッカー、野球、ハンドボール、柔道、テコンドーの一流スポーツ選手の社会貢献活動について

日本の実情と同じく、社会貢献活動を行う文化が未成熟であり、中でもトップアスリート達は、引退後ナショナルコーチに就き国威発揚的な社会貢献を担う。又、武道系の選手達は、引退後町道場において指導者になり、それぞれの分野で普及にあたっている。故に社会貢献という文化が根付いていない現状である。経済力や勉学的なレベルは高いにも関わらずこの現状は意外であった。

④ 米国ハワイ大学一流スポーツ選手の社会貢献活動について

今回の調査研究において、最も進んだ社会貢献活動を行っているのは、ハワイ大学のチームであり、選手達であった。その背景は、キリスト教の文化が根底にある事が大きい、キリスト教は、人の為、社会の為に奉仕活動を行う事が大前提のポリシーがある。又、世界でもトップの経済力を保持している事から、余裕がある事も自己中心性の考えを和らげて社会貢献活動に向かわせていると推測させられる。もう一点は、NCAA が部活動の行き過ぎをケアし、シーズン制を取らせている事も大きな背景になっている事であろう。そして社会貢献活動もユニークでその種類も豊富で大いに参考になる事例が行われている。

それらの活動は以下のとおりである。

- A、「ビーチグリーン」と称してビーチのゴミ拾いや美化活動を行っている。
- B、子供達への学習支援を行う。
- C、プログラミングの指導。ITスキルアップの為、ITボランティアとして活動する。
- D、動物保護ボランティアに参加する。保護された動物の為に募金活動をおこなう、あるいは犬の散歩や、犬舎の清掃作業をおこなう。
- E、ホームレスの生活自立支援を行う。
- F、災害時に被災地で支援活動をする。
- G 街頭での募金活動をする。
- H、傾聴活動を行う。高齢者施設や社会福祉施設で悩みや不安を聞いて不安やストレスを和らげる。
- I、グッドウィルガイド（善意通訳） 街頭や駅等で言葉が通じず困っている外国人旅行者 に語学力を活かして手助けするボランティアガイドをする。

以上の様な社会貢献活動をハワイ大学のスポーツ選手達は、オフシーズン時には行っている。他の国、地域と比較しても同じ一流スポーツ選手達とは、かなり違った文化性を持っている事が分かる事例である。

さて社会貢献活動を行う事によって、行うチームや選手達にはどのような価値や利点が生じるのであろうか？それは、直接的に物や金が回って来るものではありません。サポートされる人やコミュニティーは、良い印象を持ち選手やチームに対して良いイメージで応援したり、結びつきが強くなり自分達のゲームにも足を運んでくれるようになる可能性が生じます。本番での選手達のモチベーションは、否応にもあがり、良いパフォーマンスが出来、結果も上がる循環に期待が持てる。又、絆が深まれば、スポーツ教室での子供達の指導でもっと好きになり、ファン層の拡大や競技人口の裾野が広がる事にも期待が持てる。それから、選手個人には、様々な人との触れ合いの中、充実感や達成感が得られるメリットも得られたり、直接感謝されると責任感や積極性が身につく、自身の人生観や考え方も変化していく事にも繋がる事も予想できる。そして、繋がりが増える中、様々な価値観やバックグラウンドを持つ人とも交流する中で視野の広い人間に成長出来る事が最大の価値であると考えます。

この様な人間性を持ったスポーツマンの育成が、チャンピオンの育成と共に重要なスポーツ文化価値であると考え次第である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 二杉 茂	4. 巻 12 - 1
2. 論文標題 日本版NCAA創設に向けてのー考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スポーツサイエンス	6. 最初と最後の頁 21 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二杉 茂、伊藤 準、津田 真一郎	4. 巻 14-1
2. 論文標題 日本版NCAAについて のー考察ー学業面に焦点をあててー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツサイエンス	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二杉 茂、西脇 満	4. 巻 15-1
2. 論文標題 一流スポーツ選手の社会的責任としての社会貢献活動についての研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スポーツサイエンス	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 二杉 茂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 188
3. 書名 コーチのミッション	

1. 著者名 二杉茂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 193
3. 書名 コーチのミッション	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	西脇 満 (NISHIWAKI MITSURU) (40461016)	神戸学院大学・共通教育センター・教授 (34509)	